

幼児教育の独自性はどこにあるのか(3)

矢野 智司

子どもが動物を好きな理由

前回は動物絵本を通して、なぜ子どもが動物になるのかについて述べました。子どもは動物になることで、世界へと溶けて全面的なかかわりを実現することを明らかにしました。今回は前回の続きです。イヌやネコやウサギやハムスターといった身の回りにいる動物はもとより、ゾウやキリンやライオンといった動物園でしか見ることでき

ない動物まで、子どもは動物が大好きです。それはなぜでしょうか。なぜ子どもが動物に心を惹かれるのかについて考えてみたいと思います。

大人から見れば、子ども自体が動物にきわめて近い存在といえるでしょう。子どもは道をジグザグに歩いたり、急に飛び跳ねたり、大きな声を出したりします。それは子どもという生の在り方

が、大人のような役に立つか立たないのかといった功利性や、あるいは自分を他人からの悪意から守ろうとする防衛への関心がなく、端的に他の人々や世界のさまざまな出来事に開かれているからです。ですから、歩道の石畳があれば一個飛ばしでスキップをしますし、何か見慣れないものがあれば声をあげます。このような子どもの関心の開かれ方は「好奇心」と呼ばれたりします。

子どもは役に立つかどうかなどにかかわらず、世界のあらゆる事柄に関心を示します。大人の関心が主に功利的であるのに対して、子どものこのような関心のあり方は純粹な関心と呼ぶこともできるでしょう。そのため子どもは、大人にとってはなんの役にも立たない「がらくた」に、異様な興味を持つたりします。子どもは道ばたでいろいろなものを見つけ、ポケットのなかに入れたりします。丸っこい石ころや色ガラスの破片や

木の実、あるいは甲虫の死骸などがそうです（これらはかつて私のポケットに入っていたものの簡単なリストです）。それは子どもには知らないことが多いからではありません。私たちも知らないことはたくさんありますが、そんなことにはいち関心を払ったりしません。それというのも大人は自分に関係のないことは無視することができるところです。しかし、子どもの心は三六〇度全領域に渡って開かれています。ただ全領域に開かれているだけではありません。深く開かれています。

そのことをもつともよく示しているのは、子どもがしばしば驚嘆することです。子どもはよく「おお！」と声をあげて驚嘆します。これはとても優れた能力です。そして動物はそのような子どもの驚嘆を最高度まで高めてくれるものです。跳ねるもの、飛ぶもの、泳ぐもの、これらの動物を

見ては子どもは驚嘆の声をあげます。その声があがった瞬間に子どもはそのもの一つになっていきます。対象化したり、分節化したりできないからこそ、言葉にならない言葉「おお！」を発するのです。こうして声とともに子どもは自ら跳ねるものとなり、飛ぶものとなり、泳ぐものとなります。そしてその驚嘆は、子どもに哲学することを誘発します。驚嘆が哲学の母であるのは何も古代ギリシヤの哲学者にかぎりません。

まど・みちおは「ぞうさん」の詩で有名な詩人ですが、彼は子どもの驚きに大変敏感な人でした。そのためもあつてか、まどさんは動物についての子どもの哲学の詩をたくさん書いています。「ぞうさん」の鼻の長さへの驚きと親子関係への共感をよく知られているので、ここでは「うさぎ」を見てみましょう。

うさぎ

まど・みちお

うさぎに うまれて

うれしい うさぎ

はねても

はねても

はねても

はねても

うさぎで なくなりやしない

うさぎに うまれて

うれしい うさぎ

とんでも

とんでも

とんでも

とんでも

くさはら なくなりやしない

この詩が優れているのは、もちろん「はねてもはねても はねても はねても」と「はねても」が四度繰り返されているところですし、「とんでも とんでも とんでも」と、やはり「とんでも」が四度も繰り返されているところです。跳ねるといふ動作は一度で終わることなどなく、何度も何度も繰り返される動作です。うさぎが跳ねるのも繰り返して跳ねることですから、その様は昔から「びよんびよん跳ねる」と表現されてきたでしょう。このように何度も「はねても」「とんでも」といふ言葉を繰り返すことによつて、この詩を歌う子どもを実際のうさぎの跳ねることへと誘っていきます。この詩を歌う子どもは、跳ねずにはおられません。この詩は跳ねる反復の驚きと喜びをうまく表現しています。それでいてこの詩は子どもの哲学でもあります。

子どもは動物を前にして哲学を実践している

す。哲学といえは難しく考えるかもしれませんが、この世界は不思議に満ちていますので、子どもの頭のなかは日々謎でいっぱいです。そのなかでも最大の問いは、自分とは何者かという問いです。もちろん子どもは「人間」とか「自己」といった概念を使つて哲学したりはしません。もっと具体的なイメージを使用して哲学するのです。動物はそのような子どもの哲学の問いを生み出すとともに答えをもあたえます。

古代に人間が思考を始めて以来、多様な動物の姿や生態は、人間にこの世界を理解するための鮮やかでシンプルなイメージを提供し続けてきました。神話はそのような動物のイメージを通して世界を理解しようとする試みで一杯です。ちょうど古代人がそうであったように、子どももまた自分は何者かという問いが、動物という他者の存在を通して初めて開かれます。同様にその答えも動物

をまえにして明らかになります。二本足で歩く、言葉を話すなどといった人間と動物の違いもそうですが、それよりも重要なのは動物とつながるという生命の原型的なイメージです。動物を飼うことは動物についての認識が自然に深まりますが、このような効能は動物とともにいることの幸福感からみれば二次的です。子どもは端的に動物となり動物と生きること、この驚嘆から生命の哲学へと導かれることが重要なのです。

さて、このように子どもが動物とともに生きることが偶然のことではなく、内的な深いつながりがあるとすれば、大人になるとはこのような動物との内的なつながりを作りかえることを意味しています。子ども時代からの別れを作家たちはいろいろな形で描いてきましたが、動物との内的なつながりからの別れを描いた作品もたくさんあります。子どもの愛する動物との別れを描いたもの

は、たいてい子どもの成長物語として描かれています。

このような動物との友情や交感の悲劇的な結末を描いた優れた作品にローリングスの『子鹿物語』



(偕成社)があります。この物語は、春に自然のなかで喜びに溢れて遊ぶ少年が子鹿と出会うところから始まり、一年後にその子鹿を殺害することで終わります。子どものもつ自然(動物性)との一体感が失われる姿を描いたものです。ほかにこのような動物殺害と子どもから大人への成長とを描いたものに、ペックの『豚の死なない日』(白水社)、最近ではマンガレリの『おわりの雪』(白水社)などがあります。この三つの作品に登場する父親はいずれも病んでおり、主人公の少年は大人になることが強いられ、そのために動物(動物

性¹¹子どもの生命感¹²の殺害が起きるのです。

こうした作品は暴力的な結末をむかえ悲劇的なものです。多くの場合は、このような動物殺害は起こりませんし、以前のようなつながりをもつことができなくなりますが、大人になつたからといって動物が嫌いになるわけではありません。しかし、ここには子どもが大人になるときに切断があるという真理も語っています（大人は別のかたちで生命感を求めることになります）。ただこれは幼児教育が直面する課題ではありません。でもそのことを知っておくのは大切なことです。

幼児教育の話に戻りましょう。動物性は生命とつながり「野性」とつながりますから、それはまた「野蛮」ともつながっています。躰やマナーの習得はそのような「野蛮」を「文明化」することです。ですから躰やマナーの習得は人間化にとつて大切なことです。なにより教育はこの動物状態

を克服するものとして発展してきました。ここでも私たちは一方で人間になることと、もう一方で生命でつながりをもち深めることの二重性に直面します。これはこの連載の一回目から繰り返し返しているテーマです。

しかし、このような二重性は今に始まったことではありません。幼稚園が誕生したときからそうです。幼稚園の創始者フレーベルの思想はこの二重の課題の統一を目指してきました。フレーベルは有名ですし、なによりこの『幼児の教育』はフレーベル館から出版されています。彼の著作が読まれることはあまりありませんが、彼の思想は現在においてもとても優れたところをもっています。今回はフレーベルの話をししましょう。

（京都大学）